The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	臨床動作法における動作課題を通したやりとりのプロセスに関する研究
Author(s)	上床, 幸太
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87796
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　上床　幸太　）	
論文題名	臨床動作法における動作課題を通したやりとりのプロセスに関する研究

論文内容の要旨

本研究は，臨床動作法における動作課題を通したやりとりのプロセスを明らかにすることを目指した。本研究は第1部～第3部で構成した。

第1部は，問題と方法に関する理論編である。そこで明らかになったことは，2つあった。1つは，臨床動作法が，動作を道具とした課題努力法という独自の援助構造を軸に発展してきた一方で，やりとりのプロセスそのものを扱う研究が，心理臨床学全体を含めてもほとんど行われてこなかったという問題の所在であった。もう1つは，その解決のためには，「臨床家・研究者」として，当事者と完全な第三者の間の立場を取ることが，臨床的に意味のある出来事や当事者の主観性を扱いつつも，他者にとって了解しやすい知見を得るために必要であり，そのための方法論として発見志向型研究とプロセス研究の考え方が有用であることであった。

第2部は，調査編である。理論編で明らかになった問題意識をもとに，動作課題を通したやりとりのプロセスを「臨床家・研究者」としての第三者の視点から捉え，暗黙的な実践知としてのセラピストの内的プロセス，クライエントの主観的な体験プロセス，動作課題を通したやりとりの客観的なプロセスという3つの側面について明らかにした。研究1では，臨床事例をもとに，マイクロエスノグラフィーの手法を用いて，セラピストのアプローチと内的プロセスを分析した。その結果，実践の文脈に埋め込まれた暗黙的なセラピストの実践知を明らかにした。とくに判断が困難な場面においては，〈感覚的・経験的判断〉によって，まず関わる中で理解の糸口が見えてくるプロセスにも，重要な意義があることが示唆された。研究2・研究3では，非臨床群を対象とした試行面接を実施した。研究2では，IPRインタビューによってデータを収集し，M-GTAの手法を用いて分析し，クライエントの主観的な動作法体験プロセスを明らかにした。クライエントの主観的体験プロセスにおいては，試行的に【Thの基準を受けつけ】て，「ひとまずその通りにやってみる」ことと，そこでセラピストから適切なフィードバックをもらうことが，セラピストという外的な基準を取り入れ，セラピストへの信頼が醸成されるきっかけになることがわかった。研究3では，録画記録をデータとして，課題分析の手法を用いて分析し，クライエントが実感的理解に至るプロセスモデルとプロセス指標を明らかにした。このことにより，動作課題を通したやりとりの客観的なプロセスにおいて，「特定」と「探索」が進むことによって「修正」が起こるのではなく，「修正」を実際に行う中で実感的理解が得られるという特徴が明確になった。

第3部は，総合考察編である。まず，本研究で明らかにしたことを整理し，「臨床動作法における動作課題を通したやりとりのプロセスとは何か」という問いに対する本研究の解答を示した。すなわち，それは，上述の3つの側面の共通点として浮かび上がってきた「関わり／取り組みながらわかる」というプロセスとして表現できると考えられた。このことは，従来の臨床動作学研究において自明化して扱われなくなっていた臨床観のひとつであり，臨床動作法の暗黙的な前提を明示化することにつながったと考えられた。次に，明示化された「関わり／取り組みながらわかる」という臨床動作法の臨床観を軸に，本研究の意義について議論した。具体的には，導入期におけるクライエントの抵抗の問題と，とくに初学者のセラピストが一見矛盾した援助役割のバランスをどのように取ればよいかという問題に対する実践への示唆と臨床的意義を示した。また，他学派との比較により，臨床動作法の独自な部分と他学派とも共通する部分を整理した学術的意義について述べた。そして，本研究の採用した手法，視点，データ収集法に関して，方法論的発展としての意義を検討した。最後に，本研究の限界として，研究1，研究2，研究3において分析対象としたセッションのセッティングが，それぞれ異なることを挙げ，今後の展望を示した。

以上，発見志向型研究とプロセス研究の考え方と手法を応用し，臨床動作法における動作課題を通したやりとりのプロセスを多面的に明らかにした本研究の成果は，臨床動作学のみならず，広く心理臨床学における心理療法研究の発展に寄与しうる知見として重要な意義を持つものと考えられた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　上床　幸太　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教　授	野村　晴夫
	副 査	教　授	老松　克博
	副 査	准教授	野坂　祐子
	副 査	学外委員	井村　修

論文審査の結果の要旨

本博士論文は，動作を介してこころに働きかけることを特徴とする，1960年代に日本で開発された臨床動作法のプロセスの解明を目指している。特に，セラピストからクライエントに提案された動作課題に関する両者の間のやりとりに焦点が当てられている。従来，効果が検証されてきた一方で，その効果がいかにもたらされているのかというプロセスの検証が不足していた臨床動作法の問題点について，多角的に解明を試みている。

第１部では，文献研究によって，上記の問題点が理論的に考究された。その結果，とりわけセラピストとクライエントのやりとりの微視的プロセスが相対的に軽視されてきた問題が浮き上がった。この問題を克服するためには，クライエントやセラピストといった当事者および第三者的な観察者とは異なる，「臨床家・研究者」としての中間的な視点の有用性が示唆された。

第２部では，第１部の問題提起を受けて，方法や対象を変えながら，三種の実証研究が取り組まれた。研究１では，「臨床家・研究者」の立場から，他のセラピストが担当した臨床事例を素材に，マイクロエスノグラフィーの手法によって，セラピストのアプローチと，その内的プロセスが分析された。その結果，セラピストが判断に悩む場面における「感覚的・経験的判断」の意義が明らかとなった。観察法と面接法を併用した本研究によって，観察された行動としてのクライエントとセラピストのやりとりに基づきつつ，その背後に潜むセラピストの暗黙的な実践知が浮き彫りになった。

続く研究２では，クライエントの側の動作法体験プロセスの解明を目指して，その言語化が可能な非臨床群を対象とした模擬的な臨床動作法と，動作法体験に関する面接調査が行われた。収集されたデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）によって質的に分析した結果，クライエントはセラピストの提示した動作課題をひとまず受け入れて実施するが，その後に両者の間に信頼関係が築かれるための要諦は，セラピストからのフィードバックにあることが明らかとなった。

臨床動作法のプロセスに関するセラピストやクライエントの言語報告に依拠した研究１，２の限界を克服すべく，研究３では，やはり非臨床群を対象としつつも，臨床動作法の試行を録画した映像資料が活用された。そして，臨床動作法におけるセラピストとクライエントのやりとりの課題分析によって，臨床的に意義のある観察可能な指標の抽出が目指された。その結果，クライエントがセラピストとの間で「実感的理解」を得るに至る微視的プロセスの内実が明らかとなった。

第３部では，以上の理論的，実証的研究を総括し，動作課題を介したクライエントとセラピストの関係において，「関わり／取り組みながらわかる」という，進行する体験の過程で生じる理解の意義に関して，臨床的意義，学術的意義，方法論的発展の観点から考察された。

セラピストがクライエントに提示する動作課題を軸とする臨床動作法では，従来，両者の関係の要因に関する研究が十分とはいえなかった。本博士論文は，こうした関係の要因に対して，具体的なやりとりに関する言語的・行動的データに基づいて実証的解明を試みた点で，極めて独自性が高い。そして，この研究の成果は，臨床動作法に留まらず，多様な心理療法との比較照応を可能にした学術的・実践的意義に加え，臨床家・研究者・クライエントの複眼的な視点と，マイクロエスノグラフィーやM-GTA等の多元的な研究方法を採る方法論的意義を有している。

よって，本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。